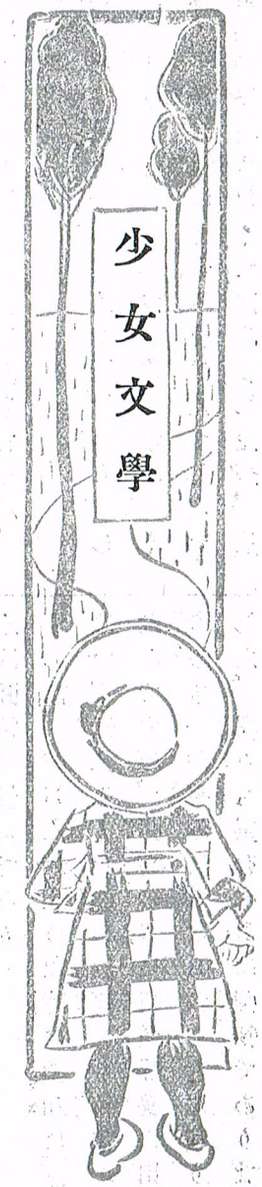

少女小説

お形見

永代美知代

『まあ綺麗なお羽織だこと、なんて美しい好い柄のお襦袢でせう、姉さん、後生だからこれあたしにお形見に頂戴。』

ゆきえさんは、いつでも定つて、姉さんの美しいお召物を見るたんび、斯樣云つておねだりするのが癖でした。

姉さんのお箪笥の引出を開けますと、どれにもこれにも、皆な立派な織物の帶だの、美しい裾模樣の着物だの、目の覺めるやうな友禪ちりめんの何彼が、ぎつしり一杯詰つて入れられてありました。

此姉さんは兄樣のお嫁で、お嫁入りの時、衣裳持ちだと云ふ評判が町ぢうひろがつて居た程でした。ですから蟲干の時の美しいことと云つたらありません。

風通しの好い裏の離座敷の、十疊のお座敷と、次ぎの間の六疊と、此二間をすつかり開け放して、彼方から此方の柱へかけ通した、幾筋とない澤山な紐の上から、緋紋の振袖の羽二重の白無垢、つゞれの丸帶、繻珍のかいどり、さては小紋の三枚重ね、い

きな縞お召の小袖と云つた風に、すき間もなく掛けつらねたそれを、夕方取り入れる時のいそがしさ！

姉樣は申すまでも御座いません、母樣も乳母やも下女も、ゆきえさんまでが出て來て、紐から取外したり、疊んだりのお手傳をいたすのでありました。

『アラまあ綺麗だ、此のお帶は何？繻珍、唐織、厚板？』

ゆきえさんはこれまでに聞いて知つて居る程の、織物の名前を并べ立てゝ訊いた末に、

『姉さん、後生だからこれあたしにお形見に頂戴な、よう屹度よう。』

と斯樣如何しても、いつもの癖を云ひ出さないでは居られませんでした。

『まあ小孃樣は何を仰有るので御座いませうねえ、御新造樣、あなたお氣になすつてはいけませんよ。』

乳母やは傍から姉さんの前をとりなすのでした。

『如何して氣になんぞしやしませんわ、ねえゆきえさん、どれでもあなたのお好きなのをさう云つてお置きなさい、姉さんは屹度忘れないで居て、お形見にしますから。』

『アラさう、そいぢや屹度よ、ねえ姉さん。』

ゆきえさんはお友達の花枝さんだの、幸子さんだのが、伯母さんのお形見に頂いたのだと云つて、持つてゐらつしやる着物や羽織が羨しくつて、是非自分でもお形見を頂いて見度いと思ふのでした。

名高い繪師が畫いたのだと云ふ、白地のぐり〳〵した濱縮緬へ、墨繪で大きく牡丹の花を浮した長襦袢と、オリーブの地色へ金と銀とで美しく、浪に千鳥を織り出した繻珍の丸帶と、それに今一つ、百人一首のかるたの札を大きく小さく散らした、友禪羽二重の裏のついたお召のコートと、此の三つを選り出して、ゆきえさんは他の裾模樣の振袖の三枚重ねや、繻珍のかいどりのやうなものよりも、是非貰ひ度いと云ひ出しました。

『オヤそれつきり、もつとお選りなさいよ、御遠慮しないでね、どれだけでもお好きなだけ、ね、此お羽織は？』

姉さんは晴れやかなお顔に莞爾り笑つて、丁度疊み掛つて被在つた、黒縮緬のお羽織をお指しになりました。

『アラ嫌だ、そんな黒いのなんぞ、あたしに着られやしませんわ、お婆さんのやうですもの、嫌なこと。』

『だつて小嬢樣だつて、いつまで紅入り友禪のお

被布ばつかり召しても被在れません。』

乳母やはまた傍から取りなしました。

『好いのよ、あたしお襦袢と帶とコートと、三つ丈けで澤山、餘り慾ばつても惡いから。』

『ホホ、ゆきえさんは慾が尠ないのね、そいぢや其代り屹度其三つはあなたにあげるやうに、さう云つて遺言しますわ。』

『遺言つて何？』

『まあゆきえさんは！』

姉さんも乳母やも二人共大笑ひに笑つて了ひました。

『そいぢや屹度ね、よう姉さん。』

ゆきえさんは恥かしくなつて、それつきり母家へ歸つて行きましたが、其後また姉さんの眞白な細い美しい指にはめて被在る、ルビー入りのと、ダイヤのと二つ指環を形見に頂く約束を致しました。

『姉さんの指は細いから、大丈夫あたしが頂いてはめても、落ちたりなんぞしなくつてよ、吃度。』

『さうかも知れませんね、ドレはめて御覽なさい。』

姉さんが藥指にさして被在つたルビー入りの方を拔いて、ゆきえさんにお渡しなさる、夫をゆきえさんが自分の中指へはめて見ますと、細いやうでも大人と小兒の手です、どうしたつて指の細さが違つて、

ずる〳〵落ちさうでいけません。姉さんはそれへ半紙を切つて卷いて下さいました。

『ね、それだと大丈夫落ちないでせう。』

『隨分ハイカラだわねえ、私の級へ被行るお友達のうちで、まだどなたも本當の金の指環なんぞして被在る方なくつてよ。まあ嬉しいこと！』

『ホホ、、本當にゆきえさんはハイカラね。』

姉さんから暫くお形見の指環を拜借して、ゆきえさんは大喜びで居ましたが、それを母樣が御覽になつて、小兒の癖に金の指環なんぞして居て、若しか落

としでもすると大變だと仰有つて、直ぐまた姉さんにお返しさせられて了ひました。

『好いわ、あたしその指環をいまにお形見に貰ふのね。』

ゆきえさんは姉さんの指にはまつた美しい光を見ては、嬉れしさうに云つて居りました。

だがゆきえさんはそれから間もなく、姉さんのお形見を、本當にいつまでも取り返へされないで頂くことになりました。

姉さんは急に、ほんの二三日病つてお死去なさいました。

其急な御病死のなかからも、平常ゆきえさんとお約束なすつて居た、お形見のことはお忘れなさらないで、姉さんは例のお襦袢と帶とコートと、それからルビーのとダイヤのと二つの指環を、是非ゆきえさんにお形見にするやうに、くれ〳〵御遺言してお逝きなさるのでした。

姉さんのお實家から本當の母樣と云ふ、上品なきり髪の小母樣がお葬式に被入つて、其後を暫くいろいろ形見わけなどの御相談で御泊りになりましたがお實家には弟たちばかりで、男の事だから着物なんぞ頂いて行つても仕方がない、それよりはせめておゝ馴染甲斐に、ゆきえさんにすつかり貰つて頂き度いと仰有るので。

『ゆきえさんは急に衣裳持ちになつてしまひましたね、姉さんのお形見をどつさり頂いたものだから。』

母樣が斯樣仰有いますと、小母樣はゆきえさんの顏をのぞき込んで、

『せめてゆきえさんでも着たり卷いたり、身につけて被下ると、死亡つたものもどんなに喜ぶか知れません、ねえゆきえさん、姉さんとあなたは隨分仲よしでしたのね。』

ゆきえさんはもう悲しくなつてしまひました。

『お形見つて、人が死去つてから頂くもの？まあさう、私些少も知らなかつたわ、そんな位なら私、もう〳〵お形見なんぞ頂かないから、母樣後生です、姉さんにお詫びしていき返つて頂いて頂戴！』

ゆきえさんは、突然母樣のお膝へ空伏して、泣いて泣いて泣き入りました。

お形見と云ふものは、どんな時に頂くものか、ゆきえさんはまだ知りませんでしたので、只お友達の花枝さんだの幸子さんだのが、『これ伯母さんのお形見に頂いたのよ。』と、いろんな着物や羽織を出して御自慢なさるものだから、自分でもお形見と云ふものを頂きたくなつたばかりなので、ゆきえさんはいつか姉さんにルビー入りの指環を暫く拜借して、お形見を頂いたと喜んで居ました位ですもの、姉さんのいきて被在るうちに、ゆきえさんさへ、今少し成人なつて、指環が落ちないで、うまくはまる丈けの太さの指になり、お襦袢やコートを引き摺らないで着られるやうになれば、自然姉さんのお形見を頂く事が出來て、さうなつたら、姉さんと御一緒にお寫眞をうつしたり、方々へ遊びに出掛けませうと樂しんで居たのでした。

『まあね、何と云ふいぢらしい！』

小母樣も母樣も御一緒にお泣きになりました。

『もう〳〵そんなにお泣きなさるものでは御座いません、姉樣の御死去なすつたのも、皆な定る御運で致し方も御座いません、あなたが何時までもお泣きになりますと、姉樣は御成佛が出來ないで、けつくけいないので御座いますよ。それよりはまあ御覽なさいまし、まあ〳〵綺麗なお形見ぢや御座いませんか。』

乳母やはゆきえさんの氣を引立てやうとして、お座敷の隅に積み重ねてあつたお形見の、美しい帶や着物を取り出して、わざとに其處へ廣げるのでした御婚禮の時姉樣がお召になつた緋紋の振袖や白無垢や、お好きで何ぞと云へばお着かへなすつた紋お

召の二枚重ねもありました。

だが見れば見る程、ゆきえさんは悲しくなつて、胸が塞つて來るばかりです。

『もう〳〵私、お形見は本當に嫌！。』

（完）

[redacted]